

若者における津軽・沖縄民謡への親近

——閉鎖的な音楽嗜好をもつ世代を対象とした嗜好実験調査を通して——

音楽教室 小川容子

Affinity for bouncing rhythm of Tsugaru and Okinawa folk songs by younger generation

——Experimental Studies of the Preference for Japanese folk songs——

Yoko OGAWA

1 問題提起

昭和24年、NHK放送文化研究所がおこなった「ラジオ音楽番組の種目愛好率」によると、「民謡・俗曲」を聞きたいと選んだ人の比率は、世論調査総数の47.1%という比率になっている。敗戦後4年めに入った日本では、長唄、謡曲、箏曲などの邦楽よりも、新しくできた軽音楽や娯楽音楽というジャンルが徐々に愛好され始めていたが、民謡は依然として根強い人気をもっていたようである。年代別にみても、20代で46%、30代で55%、40代・50代で58%とどの年代にも愛好されていたことがうかがえる。それから20年後の昭和43年、NHK放送世論調査所がおこなった調査：「好きな音楽の種目一覧」では「日本の民謡」は49%と、歌謡曲の67%に次いで、相変わらず高支持率を獲得している。ところが、更に10年経った昭和53年の同調査によると、「好きな歌や音楽の種類」の中で「日本民謡」の支持率は19%とかなり落ち込みを見せ始め、昭和61年に実施された「社会生活基本調査」（総務庁統計局）では、成人の1年間の音楽行動のなかで「民謡」を鑑賞した比率はわずか1.3%、平成3年の同調査では0.9%という極めて低い視聴率へと下がってしまっている。

つまり、ここ14、5年の間に、日本人の音楽に対する嗜好が著しく変化したといえるだろう。昨年度実施した、鳥取大学学部1年生対象の「日本民謡に関する調査」でも、「テンポがゆっくりしていて眠くなる」「民衆から生まれた音楽であるのに、私たちにとってはとっつきにくい」「退屈だなあという感じがする」といった否定的な意見が数多く寄せられた。彼等の80%以上が民謡をあまり聞いたことがないにも関わらず、である。

小泉文夫は、彼の著書の中で民謡と流行歌を比較しながら『流行歌はいかなる民衆にもただちにアピールするものの、生活との結び付きが浅く、歴史性を持たないためにすぐに忘れられてしま

うのが特徴である』が、一方『民謡は民衆から生まれたものであり、民衆に受け入れやすいことは当然』(小泉, 1958)であるとまとめている。1980年代後半におこった民謡ブームは、小泉の指摘通り、確かに、民謡と大衆の関わりについて改めて気付かせてくれた現象ではあった。しかし、そのブームが去った今、若者世代と民謡の間にできたある種のギャップは、昨今の音楽ジャンルの多様化・複雑化、更に曲1曲ごとの流行のサイクルの短さといった種々の要因によって、ますます広がっているようである。

民謡は、けれども、学生達が指摘するようにすべてが「ゆったりとしたテンポで、朗々とした節回しをもって、単調」だという訳ではない。例えば津軽や沖縄地方には、テンポが速く、弾みのある独特なリズムパターンをもった民謡が数多くあり、いわゆる若者世代が好むポピュラー音楽と多くの共通点を持っている。こうした民謡に対して若者はどのような興味を示すのだろうか。

近年、多くの音楽教育学者や研究者によって、教育現場でどのように日本伝統音楽を教えるかという指導法についての研究が数多くおこなわれてきた(小島, 1981; 伊藤, 1992; 桂, 1994; 茂手木, 1995; 伊能, 1995)。更に、伝統音楽に関する世代間の感覚の違いを明らかにした基礎研究(Oku, 1992; Ogawa, Kimura & Mito, 1995)も蓄積されてきた。しかし、ポピュラー音楽との共通項といった視点から民謡に対する若者の嗜好を扱った基礎研究は、あまりおこなわれていないのが現状である。

本研究では、以上のことを踏まえて、民謡に対して若者世代がどのような嗜好反応を示すのか、民謡の種別によってその反応に違いがあるのか、小学生と大学生の反応傾向は同じなのか、彼等の嗜好と音楽熟達度や音楽授業に対する評価との間に何らかの関連はあるのか、といったことを明らかにすることを目的とした。被験者は、鳥取大学学部生56名と広島大学附属小学校5年生73名。生徒個人々の反応を測定するために、MCRA (Multi Channel Response Analyzer) を用い、SAS (Statistical Analysis System) による分析をおこなった。音刺激は、民謡のリズム(弾みがあるかないか)と音構造(陽音階/陰音階/琉球音階)及び曲への精通度を考慮した上で、津軽よされ節、小諸馬子唄、よさこい節、さんさ時雨、多幸山、小浜節の6曲を選んだ。

以下、実験、結果、考察の順にまとめる。

2 実 験

被験者 鳥取大学学部生56名(音楽熟達者28名/非音楽熟達者28名)

広島大学附属小学校5年生73名(音楽熟達者28名/準音楽熟達者23名/非音楽熟達者22名)

音刺激

Table 1. Musical Stimuli

	陽音階	陰音階	琉球音階
弾みのある	津軽よされ節	よさこい節	多幸山
弾みのない	小諸馬子唄	さんさ時雨	小浜節

陽音階 (ラドレミソラ)

陰音階 (ミファラシドミ)

琉球音階 (ドミファソシド)

方法 大学生、小学生とも6つのグループに分けられ、グループごとに曲順を変えた音刺激、6曲が呈示された。教示は以下の通りである。

「これから音楽が聞こえてきます。曲が始まって『いいな、もっと聞きたいな』と感じたらスイッチを押してください。『もう聞きたくないな』と思ったらスイッチから手を離してください。曲が流れている間は何度でもスイッチを押すことができます。音楽は全部で6曲です。」

個々人の反応はそれぞれ別個に、スイッチボックスとコントロールボックスを通してコンピュータに取り込まれ、MCRAプログラムによって計測、分析された。実験終了後、各自のこれまでの音楽歴について調査用紙に記入すると同時に、小学校や中学校で受けてきた音楽の授業に関して5段階評価をするよう求められた。

3 結 果

次の表2は、大学生・小学生別に曲別のスイッチオン時間を示したものであり、表3は分散分析の結果を示したものである。

表3に示したように、分散分析の結果、「被験者の年齢」「弾みがあるかどうかというリズム」「音階」の3要因すべてに1%水準で有意な差が認められた。つまり、年齢別では、大学生よりも小学生の方がスイッチを長く押す傾向にあり、リズムという観点からみると、どの被験者も弾みがあるリズムの方をより好んでおり、音階の中では陽音階と琉球音階への好みが高いということを示している。更に、有意傾向が認められた「被験者の年齢×リズム」及び「被験者の年齢×音階」の交互作用は、弾みのないリズムに対しても、小学生はある程度興味を示していること、陽音階と琉球音階において、小学生の方が大学生よりもスイッチを長く押す傾向にあることを表わしている。言い換えれば、大学生は琉球音階に対しては「もっと聞きたい」という興味を示しているものの、陽音階と陰音階に対しては、それほど関心を示していないこと、更に、弾まないリズムをもった曲については、あまり好きではないと感じているようである。しかし、両者とも、弾むリズムをもった曲に対しては同じような反応を示し、特に「多幸山」(琉球音階/弾みのあるリズム)のスイッチオン時間は、6曲の実験曲中、最も長くなった。

次に、スイッチオン時間が被験者の音楽経験や音楽評価とどのような関係にあるのか、被験者別に検討した。

音楽熟達の度合いは、学校以外の音楽経験年数が現在4年以上、あるいは過去に6年以上ある者を音楽熟達者とし、経験年数が1年以内、あるいは無い者を非音楽熟達者、上記のどちらにも該当しない者を音楽経験者としてカテゴリー分類した。

5段階で記入させた、これまでに受けた日本音楽の授業に関する評価(小学生の場合は、現在の音楽授業に対する評価)は、5及び4とした被験者を「肯定的に授業を受けとめている」として高評価群、3を普通評価群、2及び1を「否定的に受けとめている」として低評価群と名づけ、分類した。

表4と5は大学生の、表6と7は小学生のスイッチオン時間を、それぞれカテゴリー別に示したものであり、表8はその相関係数と有意差を示したものである。

表8に見られるように、大学生、小学生とも、音楽熟達度の度合いとどのような民謡が好きかと

Table 2. Average of PS time (sec) and percentage by undergraduates and elementary school children

曲名	津軽よされ節	小諸馬子唄	よさこい節	さんさ時雨	多幸山	小浜節
音階	陽音階		陰音階		琉球音階	
リズム	弾みのある	弾みのない	弾みのある	弾みのない	弾みのある	弾みのない
大学生	13.17(%)	8.62	14.50	1.76	34.23	9.71
	39.38(sec)	17.24	27.26	3.53	49.29	27.76
小学生	27.54(%)	16.40	20.42	12.82	41.19	21.61
	82.35(sec)	32.80	38.40	25.64	59.32	61.79

Table 3. Analysis of Variance <unweighted-mean solution>

Source	SS	df	MS	F	p
A：被験者	23.45	1	23.45	13.92	0.00****
B：リズム	17.99	1	17.99	68.10	0.00****
AB	1.15	1	1.15	4.36	0.04*
C：音階	16.76	2	8.38	37.56	0.00****
AC	1.44	2	0.72	3.22	0.04*
BC	0.56	2	0.28	1.39	0.25
ABC	0.88	2	0.44	2.18	0.12

* p < .05, ** p < .01, *** p < .005, **** p < .001

Table 4. Average of PS time (sec) and percentage by undergraduates (Musician vs Nonmusician)

曲名	津軽よされ節	小諸馬子唄	よさこい節	さんさ時雨	多幸山	小浜節
音階	陽音階		陰音階		琉球音階	
リズム	弾みのある	弾みのない	弾みのある	弾みのない	弾みのある	弾みのない
音楽 熟達者	16.04(%)	11.20	11.22	2.13	34.71	8.67
	47.96(sec)	22.41	21.09	4.26	49.99	24.80
非音楽 熟達者	10.30(%)	6.04	17.78	1.40	33.75	10.74
	30.79(sec)	12.08	33.43	2.79	48.60	30.73

Table 5. Average of PS time (sec) and percentage by undergraduates (Rating music class: Low vs Middle vs High)

曲名	津軽よされ節	小諸馬子唄	よさこい節	さんさ時雨	多幸山	小浜節
音階	陽音階		陰音階		琉球音階	
リズム	弾みのある	弾みのない	弾みのある	弾みのない	弾みのある	弾みのない
高評価群	23.19(%) 69.35(sec)	12.96 25.93	22.88 43.02	1.35 2.71	55.73 80.26	18.82 53.82
普通評価群	10.16(%) 30.37(sec)	4.58 9.16	12.42 23.35	1.65 3.30	23.62 34.01	7.20 20.59
低評価群	11.49(%) 34.35(sec)	11.64 23.27	12.49 23.48	2.16 4.32	36.31 52.28	7.87 22.51

Table 6. Average of PS time (sec) and percentage by elementary school children (Musician vs Music-learner vs Nonmusician)

曲名	津軽よされ節	小諸馬子唄	よさこい節	さんさ時雨	多幸山	小浜節
音階	陽音階		陰音階		琉球音階	
リズム	弾みのある	弾みのない	弾みのある	弾みのない	弾みのある	弾みのない
音楽 熟達者	27.53(%) 82.30(sec)	14.4 28.80	20.32 43.28	12.31 24.61	33.2 47.81	13.86 39.64
音楽 経験者	27.23(%) 81.43(sec)	21.56 43.12	17.86 38.05	14.32 28.63	44.8 64.56	32.47 92.85
非音楽 熟達者	29.13(%) 87.12(sec)	14.21 28.41	16.20 34.50	12.48 24.95	49.06 70.65	20.07 59.31

いう民謡に対する嗜好との間にはほとんど相関関係が認められず、更に、音楽授業をどのように受けとめているか(受けとめてきたか)という授業に対する評価と民謡に対する嗜好の間にも、相関関係はほとんど認められなかった。これは実験前の予想と大きく異なることであったが、民謡を授業で扱う際には、生活や季節の行事との関わりといった、「身近なもの」という視点から題材にとりあげることが多いので、地域性を排除した今回の実験ではその影響をとらえることができなかったのかもしれない。

では、以下に、被験者別にまとめた大学生と小学生それぞれの嗜好の特徴を記す。
大学生

Table 7. Average of PS time (sec) and percentage
by elementary school children (Rating music class: Low vs Middle vs High)

曲名	津軽よされ節	小諸馬子唄	よさこい節	さんさ時雨	多幸山	小浜節
音階	陽音階		陰音階		琉球音階	
リズム	弾みのある	弾みのない	弾みのある	弾みのない	弾みのある	弾みのない
高評価群	29.92(%) 89.47(sec)	17.66 35.33	23.33 43.86	14.79 29.58	41.69 60.03	21.56 61.67
普通評価群	13.99(%) 41.84(sec)	9.69 19.38	4.43 8.33	1.63 3.26	40.88 58.86	19.48 55.72
低評価群	15.32(%) 45.80(sec)	5.10 10.2	0 0	2.70 5.40	13.75 19.80	45.38 129.80

Table 8. Correlation coefficient (r)
by undergraduates and elementary school children

		津軽よされ節	小諸馬子唄	よさこい節	さんさ時雨	多幸山	小浜節
熟達度	大学生	r = 0.26	0.10	-0.14	0.15	0.05	-0.00
		p = 0.06	0.20	0.32	0.26	0.70	0.98
	小学生	r = 0.02	0.10	0.15	0.00	-0.15	0.00
		p = 0.84	0.38	0.21	0.98	0.21	0.98
評価	大学生	r = 0.11	0.07	0.11	-0.08	0.06	-0.24
		p = 0.41	0.61	0.40	0.55	0.66	0.08
	小学生	r = 0.12	0.11	0.26	0.19	0.05	0.05
		p = 0.30	0.36	0.03	0.10	0.69	0.69

- (1) 弾みのないリズムよりも弾みのあるリズムを好む傾向にある。
- (2) 琉球音階に対してはかなり興味を示したが、陰音階と陽音階に対しては、それほどではない。
- (3) 6曲の中で最も関心を集めたのは「多幸山」(琉球音階/弾みのある)である。
- (4) 学校以外の音楽経験と嗜好との間には、相関関係はほとんど認められない。
- (5) これまで受けてきた日本音楽の授業に対する評価/関心と嗜好の間にも相関関係はほとんど認められない。

小学生

- (1) 弾みのないリズムよりも弾みのあるリズムを好む傾向にあるが、その嗜好の差は大学生ほど顕著ではない。
- (2) 「小諸馬子唄」(陽音階/弾みのない)や「小浜節」(琉球音階/弾みのない)に対して、大学

生よりも関心度が高い。

- (3) 「多幸山」(琉球音階／弾みのある) に対する興味はきわめて強い。
- (4) 学校以外の音楽経験と嗜好との間には、相関関係はほとんど認められない。
- (5) 現在受けている日本音楽の授業に対する評価／関心と、嗜好との間にも相関関係はほとんど認められない。

このように、弾みのあるリズムと琉球音階に対しては、大学生、小学生とも同じように積極的な関心を示したが、弾みのないリズムや陽音階に対しては、被験者間でとらえ方が異なっているようである。

次に、その例として、小学生が「小諸馬子唄」のどの部分でスイッチを押したかを時系列で示したものを掲げる(図1)。

この図から、曲が始まった直後(7—38sec)と中間過ぎ(114—125sec)に20人以上の反応があり、この部分が小学生たちの興味を集めた箇所であるといえる。どちらも、尺八の前奏の後の「こもろー」 「黒よ(あおよ)ー」という唄の入り部分であり、母音を延ばす、ふるわせるといった独特の発声が始まる部分でもある。一方、大学生の場合は、1割の学生が冒頭から中間部まで(12—128sec)スイッチを押し続けていたが、そのほかの学生は全く関心を示さず、中には実験終了後に「聞き続けるのが、とてもえらい(大変である)」と感想を述べた者もいた。

「小諸馬子唄」は尺八を伴奏楽器にしているため、この管楽器特有の「鳴り始めに必然的に生じる無音の瞬間」や「不確実なアタック」が特色とされる曲であり、更に、微分音程の「ユレ」や「こもった」発声法によって、幽玄且つ独特な世界が構築されている曲でもある。大学生ではなく小学生達の中に、こうした、いわゆる追分様式に魅力を感じる生徒が多くいたというのは、非常に驚きであるが、「若年層の方がさまざまな様式を受け入れる傾向にある」というA. LeBlanc (1991)の説を支持するものであるともいえる。この点に関しては、更なる追研究が必要である。

小諸馬子唄

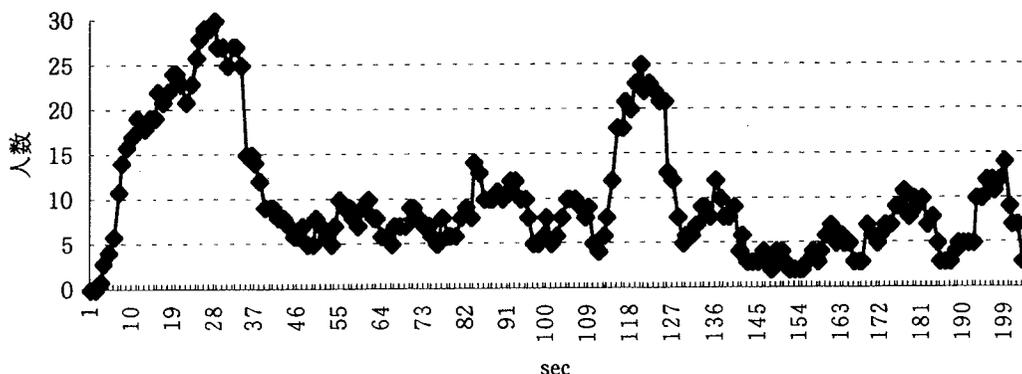


Figure 1 Temporal change of the position where subjects pressed switch in Komoro-mago-uta (Elementary school children)

4 考 察

以上、若者世代がどのように日本民謡をとらえているのか、その嗜好の実態を明らかにするために大学生と小学生を対象に実験調査を実施し、MCRAを用いて分析をおこなった。その結果、被験者の嗜好は音楽熟達度や音楽授業への評価度とはほとんど相関がないものの、年齢によって有意に異なること、しかもリズムの違いや音構造の違いによって大きく影響を受けていることが明らかになった。年齢別にみると、大学生は弾まないリズムよりも弾みのあるリズムに対して積極的に「快」の反応を示し、小学生は両者に興味を示すことが分かった。更に、琉球音階を強く支持する大学生に対し、小学生は陽音階と琉球音階のどちらも好んでいることが明らかになった。全体として、大学生よりも小学生の方が、どの曲に対しても、より肯定的に受けとめる傾向がみられた。

年齢の別なく圧倒的に支持されたのは、弾みのあるリズムと琉球音階をその構成音とする、沖縄民謡の「多幸山」であった。この曲の反応時間が、なぜ、長くなったのか。その理由として、沖縄音楽の独自性と、現代の若者世代の「微分化」(山田, 1996)、更に、陽音階との親近説(東川, 1990)をあげておきたい。

九州の南に広がる奄美、沖縄、宮古、八重山という南西諸島は、その音楽様式やジャンル形態において本土の音楽とはかなり異なっており、且つ、島それぞれが極めて独自性の強い音楽文化を保持している地域である。1970年以降多くの研究者達によって、この南島(沖縄)音楽は、中国やポリネシア、その他東南アジア諸国からさまざまな文化の影響を受け、それによって独自の音楽文化を作り上げてきたことが明らかにされた。その一方で、一バンドグループから発信された沖縄音楽が若者世代に熱狂的に受け入れられ、1980年代の「島唄」ブームを巻き起こしたことは、記憶に新しい。

山田によると、現代の若者は、音楽から意味(メッセージ)を聞き取るのではなく、『音楽を皮膚感覚に収束』させ、『さまざまに戯れながら流れている音の響きに、身体を、その表層において反応させていく』という。つまり、実験で扱った「多幸山」は、本土の音楽とは異なる沖縄音楽の独自性と若者に受け入れられるさまざまなアспект：オフビートの効いたリズム、にぎやかな器楽伴奏、波ノリのようなスイング感など：を併せもった音楽として(あるいは「響き」として)とらえられたのではないだろうか。

また一方、東川によって、琉球音階が陽音階と非常に近い関係にあるという理論も発表されている。東川は『第一琉球類2 シャープ均による「A Cis D E Gis A」と陽類ナチュラル均「ACDEGA」とは、ドが半音シャープしただけの違いであり、容易に転類できる関係にあるのではないかと説明している。「多幸山」が支持された原因は、このように、リズムやビート、音階、旋律進行といったさまざまな要因に寄因すると思われるが、今後は、奄美や宮古といった沖縄の別の地域の民謡との比較、東南アジア諸国の音楽との比較という多方面からのアプローチによって、この点を立証していきたいと思う。

若者世代が質問紙の中で明らかにした、「のんびりしていて、面白くない」といった民謡に対するイメージは、彼等がそれと意識しないうちに、民謡に対するある種の固定観念となって定着しつつあるように思われる。実験で扱った「多幸山」が圧倒的な支持率を得たことは、この沖縄民謡が、最近のポピュラー音楽といかに多くの共通点をもっているかを明らかにしたと同時に、我々教師が日本の民謡をどのように指導すべきか、という大きな課題に関して、一つの方向性を示したと思わ

れる。わが国の民謡は、その種類がきわめて豊富であり、曲それぞれが実に奥の深い世界をもっている。本実験で明らかになった結果が、民謡を、そして日本音楽を教える際の、一つの手がかりになることを願ってやまない。

謝 辞

本研究を行うにあたり、実験に協力して下さった広島大学教育学部吉富功修助教授をはじめ、参加して下さった鳥取大学教育学部学生、広島大学附属小学校の先生方、及び生徒の皆さんに心より感謝申し上げます。

引用文献

- (1) 伊藤佐保美 (1992) 「日本音楽の学習指導の基礎—雅楽における学習過程の考察を通して」『音楽教育学』第21—2号, 日本音楽教育学会 pp. 3—12.
- (2) 伊野義博 (1995) 「音楽科教育における日本音楽の学習法に関する一考察—唱歌による箏の学習事例の検証から」『音楽教育学』第25—2号, 日本音楽教育学会 pp. 1—13.
- (3) NHK放送文化研究所 (1982) 「放送番組世論調査」
- (4) Oku, S. (1994) *Music Education in Japan*. Neiraku Arts Studies Center.
- (5) Ogawa, Y., Kimura, T. & Mito, H. (1994) “Modification of Musical Schema for Japanese Melody: A Study of Comprehensible and Memorable Melody.” *Bulletin of the Council for Research in Music Education*, No. 127, 136-141.
- (6) 桂 博章 (1994) 「音楽科教育における異文化理解の方法—自国の音楽を立脚点として」『音楽教育学』第24—1号, 日本音楽教育学会 pp. 11—20.
- (7) 金井喜久子 (1954) 『琉球の民謡』音楽之友社
- (8) 久保けんお (1960) 『南日本民謡曲集』音楽之友社
- (9) 小泉文夫 (1958) 『日本伝統音楽の研究』音楽之友社
- (10) 小島律子・沢田篤子 (1981) 「日本音楽の伝統的学習方法—その特徴と学校音楽における現代的意義」『大阪教育大学紀要』第1部門第30巻, pp. 15—32.
- (11) 総務庁統計局 (1991) 「社会生活基本調査」
- (12) 東川清一 (1990) 『日本の音階を探る』音楽之友社
- (13) 茂手木潔子 (1995) 「義太夫節の学習法」『諸民族の音』音楽之友社 pp. 339—359.
- (14) 山田陽一 (1996) 「民族音楽学から見た現代日本のポピュラー音楽」『音楽教育学』第26—2号, 日本音楽教育学会 pp. 59—69.
- (15) LeBlanc, A (1991) “Effect of maturation/aging on music listening preference: A review of the Literature.” Paper presented at the Ninth National Symposium on Research in Music Behavior, Canon Beach, Oregon, U.S.A.

